

## 要旨

「昨日から2人少ない1009人」のように、比較基準を表すカラ格が使用される実態を、新聞記事調査と容認度調査から明らかにしする。さらにその性質を分析することにより、どのようにしてこの用法が生じたかを推測する。

1. はじめに<sup>1</sup>

起点などを表す日本語のカラ格とヨリ格は、競合しながら共存している。カラ格は空間的起点、時間的起点、原因などを表し、ヨリ格の空間的起点、時間的起点の領域に入り込んでいるが、比較の基準はヨリ格のみが表すという状況にある。しかしながら、コロナ関係の報道などにおいては、ヨリ格ではなくカラ格を使う、以下の(1)のような比較構文がしばしば耳にされた。

- (1) 厚生労働省によりますと、今日午前0時の時点で全国の重症者数は昨日から2人少ない1009人でした。（テレ朝 news 2021/1/23）

この発表では、この用法を比較基準のカラ格と呼び、新聞記事における用例調査と、日本語話者による容認度調査の結果に基づいて、その存在の実態と性質について明らかにする。さらに、関連するカラ格の用法と比較しながら、その用法がどのようにして生じたのかについて、推測する。

## 2. 比較基準のカラ格の用例

比較基準のカラ格の用例としては、以下のような例がインターネット上で見つかる。

- (2) a. 13日時点の入院患者数は前日から12人多い926人で重症者は9人だった。（日経新聞 2023年1月13日） <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOFC136B00T10C23A1000000/>
- b. 一方、「人工呼吸器か体外式膜型人工肺（ECMO（エクモ））を使用」とする都基準の重症者数は前日から4人多い89人で、緊急事態宣言解除後の最多を更新した。（朝日新聞デジタル 2020年12月31日）
- c. 観客数を春の3000人から2000人多い5000人に増員。（スポニチアネックス 2020年9月9日） <https://www.sponichi.co.jp/baseball/news/2020/09/09/kiji/20200909s00001089040000c.html>
- d. 22年度、23年度には定員超過はなくなり、24年度では定員から1人少ない入学者である。（佐賀大学平成24年度経済学部・経済学研究科自己点検・評価報告書） <https://www.saga-u.ac.jp/hyoka/gakugai/16-bukyokutouhyoka/H24bukyoku/H24keizai.pdf>

これらには一定の傾向が見て取れる。i)従属節（連体修飾節）で使われている、ii)差分を表す「12人」などが共起している、iii)比較の対象が過去の一時点であるか、その時点での数値である場合が多

<sup>1</sup> 本研究においては、神戸松蔭大学の松田謙次郎氏、国立国語研究所の前川喜久雄氏、小木曾智信氏、諸隈夕子氏の助言を得た。ここに感謝の意を表したい。この研究は国語研共同研究プロジェクト「述語の意味と文法」の研究成果である。

い、の3つである。

(1) (2)と意味的に似た表現として、形容詞を使った比較構文ではなく、増減の動詞を用いた(3)がある。この場合は時間的経過に伴う増減が表現されているが、比較も関わっている。

- (3) a. 今日の新規感染者数は昨日（の55人）から15人増えて70人だった。  
b. 今日の累計感染者数は昨日（の55人）から増えていない。

先の(1) (2)は実際のところ、(3)とほぼ同じ内容を伝える表現である。そのため(1) (2)は(3)のような表現の言い間違いか、多様性を持たせるための臨時的言い換え表現のように思われるかもしれない。しかしながら、「増える」を使った(3)の用法は主節で使うことができ、また差分は必要ではない。その点で、比較基準のカラ格の用法は、(3)の単なる言い間違いや言い換えとは考えられない。また、どうして(1) (2)には(3)にはない制約があるのかは、比較基準のカラ格の性質を考える上で重要な意味を持つ。なお、(3)のカラ格においても、先行時間（時間的起点）を示す場合と、その時間における数値（変化起点値）を示す場合がある点は注目される。

この用法について、一部の話者は比較的新しい言い方であるという印象を持つ。実際に、2005年までのデータを含むBCCWJでは、(1) (2)のような表現は見つからない。このことは、この用法が2005年以降に広まった用法であることを示唆している。

ただし、比較基準のカラ格と類似した特徴を持つ例がBCCWJのデータにも見られる。以下の文である。この文では、比較基準のカラ格と同様に「差分値+形容詞」がカラ格と共に起している。

- (4) リビングのフロアから25センチ高い茶の間の床下には、段差を利用した引き出しが。 （『住まいの100選別冊 新しい住まいの設計117 (No. 34)』2002）

この文は、人数の増減ではなく、空間的な高さについて使われている。リビングの床を起点とした上方向への距離の計測によって、茶の間の床の位置を表現している。これと近い用例としては、(5a)があり、(5b)とほぼ同義である。

- (5) a. その山の展望台は、中腹の山小屋から280メートル高いところにある。  
b. その山の展望台は、中腹の山小屋から280m上ったところにある。

(5a)では移動動詞は使われていないが、仮想的な人の移動が背景に想定されている。(4)と(5)は、認知意味論で言う虚構移動（あるいは主体的移動）が関わっている文である（Matsumoto 1996, Talmy 2000）。ここでは、(4)、(5a)のようなカラ格を、位置規定のカラ格と呼ぶ。このカラ格も通例、従属節内で、差分句と共に使われる。

以下では、比較基準カラ格を含む文、及び関連する文に関して、新聞記事における用例調査と、容認度調査を行った結果を報告し、比較基準カラ格の性質とその出現について考察する。

### 3. 新聞記事調査

新聞記事調査は、日本経済新聞（2013～2015年、2020～2022年）、朝日新聞（2016～2022年）・毎日新聞（2014～2020年）の記事のデータに基づくものである。これらの全国版記事のデータを、全

文検索システム「ひまわり」を用いて検索し、人数の増減について述べる文を収集した<sup>2</sup>。人数の増減については、交通事故死者数、合格者数、当選者数、採用人数、感染者数などの増減が含まれる。それを表す形式には、述語としては形容詞（比較構文）、「増える」などの増減の動詞、「（10人）増（の）」などの造語成分のものがある。また、比較基準あるいはそれに類する概念の表示には、カラ格、ヨリ格、「～と比べて」「～比で」などが含まれる。なお、ここでは「～人」などの差分が含まれている文に限って収集している。

### 3.1 比較構文

まず、述語が形容詞である比較構文を見る。3紙の全国版記事では、カラ格が使われている例はごく少数しか見つからなかった（日経 2020～2022 で 2 件/820 件、朝日 2016～2022 で 6 件/4356 件、毎日 2014～2020 年で 1/1112 件）。以下が例である。

- (6) a. 硬式部員数は昨年度から 1263 人少ない 16 万 7635 人だった。【朝日 2016 年】
- b. 第一生命保険は 2021 年度の営業職員の採用計画を、前年度から 2000 人少ない 5000 人程度にする方針を固めた。【日経 2021 年】

インターネット上ではコロナ報道において比較基準カラ格の例が多く見られたが、新聞記事データからはそれが見いだせなかった。ただし、補助的に行った日経テレコンを用いた日経新聞の地方版を含む記事検索では、(1) (2) のようなカラ格が形容詞述語と共起する用例が、コロナ報道で多数観察された。2020 年 2 例、2021 年 9 例、2022 年 68 例であり、2022 年で急激に増加していた。全国版と地方版の差および年度での変化については、執筆者の違い、あるいは新聞社内の校閲プロセスにおける判断が影響しているのかもしれない。

- (7) 2 日時点の患者数は前の日から 51 人多い 4 万 5946 人で、重症者数は横ばいの 4 人だった。【日経 地方経済面（北海道）2022 年 8 月 4 日】

### 3.2 増減動詞文

述語が増減を表す動詞（「増える」など）の場合では、カラ格の増加傾向が認められた。図 1 は、

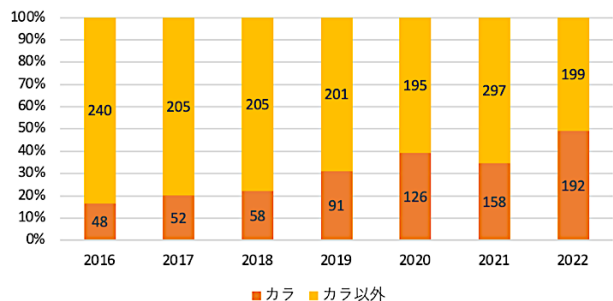


図 1 増減の動詞と共起するカラ格の割合の変化（朝日新聞）

<sup>2</sup> 人数の増減を表す例を検索する際は、「昨年より 10 人多い」などの用例を得るため、「全文検索システムひまわり」上で正規表現を用いて以下のように指定した。このため、「昨年より多い」のように人数を明示しない例は含まれていない。キー[0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 百 千 万 億 兆]+(人|名)、前文脈：(から|より|よりも|比べて|比で|比較して|以来|以降)、後文脈：(多|少|増|減)

朝日新聞の2016年～2022年の記事データで、人数の増減を動詞で表した文における、比較基準等を示す表現を調べた結果である。ここでは、カラ格の場合と、カラ格以外（より・よりも・比べて・比で・比較して・以来・以降）の場合に分けて示している。図1は明らかな増加傾向を示している。<sup>3</sup>

2020年以降は新型コロナウイルス報道により、カラの使用割合が変化している可能性がある。そこで、新型コロナウイルスに関する文脈（以下コロナ文脈）とそれ以外に分けて比較表現の使用頻度を見たところ、やはりカラの使用の緩やかな増加が見られた。日経新聞および毎日新聞においても同じ傾向が見られた。

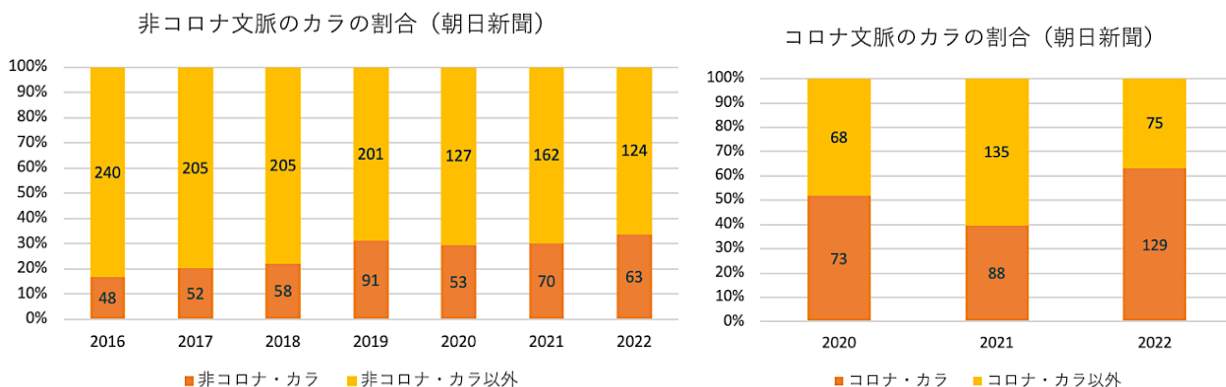


図2 非コロナ文脈とコロナ文脈における増減の動詞と共起するカラ格の割合の変化（朝日新聞）

### 3.3 コロナ文脈

データからはコロナ文脈とカラ格の「相性の良さ」も示唆される。述語が形容詞か動詞かを問わず、人数の比較・増減に関する例を、コロナ文脈とそれ以外に分けて調べた結果が図4である（毎日新聞は2021年以降のデータがないため2020年のみの集計）。コロナ文脈では非コロナ文脈よりもカラ格の使用割合が高い（朝日新聞： $\chi^2(1)=31.96$ ;  $p<.001$ （イエーツの修正式）；毎日新聞： $\chi^2(1)=6.38$   $p<.05$ （イエーツの修正式）；日経新聞： $\chi^2(1)=46.72$ ;  $p<.001$ （イエーツの修正式））。

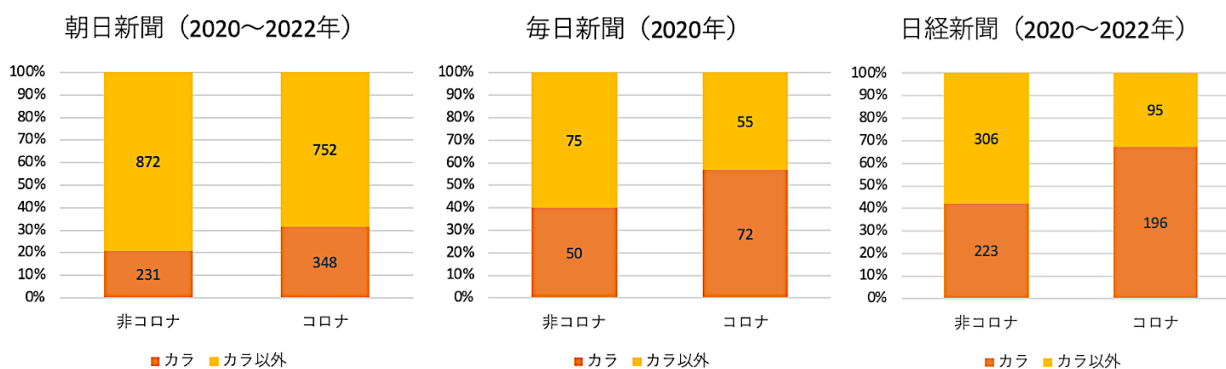


図4 新聞記事におけるカラ格とカラ格以外の使用割合（全述語；コロナ文脈と非コロナ文脈）

## 4. 容認度調査

### 4.1 方法

<sup>3</sup> カラ格はヨリ格に対して使用頻度が全般的に高くなっている。図1の変化がそのような一般的な変化の一部なのか、増減の動詞に限った変化なのかは、今後の研究課題である。

容認度調査として、Yahoo クラウドソーシングによる調査を行った。実施時期は2023年8月と9月である。課題は、134の文（及びフィラー文）の容認度を「まったく問題がない」から「きわめて不自然」の5段階で評価してもらうというものである。クラウドソーシングの設定上、問題文をランダムに6つの設問群に分けて実施した。参加者は関東在住の10台から60台の日本語話者で、設問群ごと450名（各年代で男女50名ずつ。ただし60代は男女あわせて50名）が回答した。すべての参加者がすべての設問群に答えたわけではなく、参加者の総数は480名である。すべての設問群に答えた人数は394名である。

調査では、以下の点で異なる文の容認度を調査した。(a)数値の種類、(b)節の種類、(c)差分値の有無、(d)比較対象の種類、(e)比較対象の格標識、(f)述語の種類である。(8)では、(a)はコロナ新規感染者数、(b)は従属節、(c)は差分有り、(d)は先行日時（前日）、(e)はカラ格、(f)は形容詞である。

(8) 1日の新型コロナウイルスの新規感染者数は、前日から43人多い245人でした。

(8)のような新規感染者に関する文では、比較対象として、i)先行日時（「前日」「前の週の同じ曜日」）、ii)先行数値（「前日の～人」「一週間前の同じ曜日の～人」）、iii)非先行値（「予想」）、さらに二つの地域の感染者数を比較する文を作成した。このほか、(a)については累計感染者数、重症者数、図書館利用者数、さらには人数以外の数値として、交通事故数、内閣支持率、ガソリン価格についても文を作成した。ただし、調査する文の数を限る必要性から、全ての組み合わせを調べることはしていない。たとえば、累計感染者数、重症者数、図書館利用者数、内閣支持率、ガソリン価格については、(d)は前日のみとした。また、上記のすべての場合について、形容詞の比較構文の他に、各種人数では「増える」、内閣支持率、ガソリン価格では「上がる」という動詞を用いた文もテストした。その場合は主節のみで調査を行った。このほか、フィラーを加えて調査を行った。これに加えて、空間的位置を規定する文についても、(b)節の種類、(c)差分値の有無、(e)比較対象の格標識、(f)述語の種類を変えてテストした。

## 4.2 結果

以下では結果の一部について平均容認度を0から10の値で示す。なお、全被験者における全回答の容認度の平均値は7.84であった。

### 4.2.1 比較基準のカラ格

主な結果として以下のことが挙げられる。まず、新規感染者数の形容詞比較構文において最も容認度が高かったのは(9)であり、8.06の平均容認度が得られた。

(9) 1日の新型コロナウイルスの新規感染者数は、前の週の同じ曜日の351人から35人多い386人でした。(8.06)

差分の有無と節の種類がどのような影響を与えるかについて、「前日」の文で比較すると、(10a)と比べて主文での使用(10c)は容認度がやや低く、差分句がない文(10b)は容認度がかなり低かった。

(10) a. 1日の新型コロナウイルスの新規感染者数は、前日から43人多い245人でした。(7.49)

- b. 6日の新型コロナウイルスの新規感染者数は、前日から多い293人でした。(5.09)
- c. 2日の新型コロナウイルスの新規感染者数は、前日から35人多かった。(6.28)

比較対象が先行日時と先行数値の場合は、容認度が低かった。具体的には〈予想〉との比較では容認度がやや低く、地域間の比較はさらに低かった。

- (11) a. 9日の新型コロナウイルスの新規感染者数は、予想から20人多い380人でした。(6.68)
- b. 大阪の新型コロナウイルスの新規感染者数は、東京から45人多い283人でした。(5.21)

人数以外の数値については、交通事故数、内閣支持率、ガソリン価格の場合の容認度は以下の通りであった。

- (12) a. 8日の図書館の利用者数は、前日から20人多い396人でした。(7.44)
- b. 10日の交通事故数は、前日から12件多い52件でした。(7.57)
- c. 1日のガソリン価格は、前日から2円高い161円でした。(7.65)
- d. 12月の内閣支持率は、前の月から3ポイント高い44ポイントでした。(7.99)

#### 4.2.2 位置規定のカラ格

位置規定のカラ格を用いた(13)は、以上のどの文よりも容認度が高かった。

- (13) その山の展望台は、中腹の山小屋から280m高いところにある。(8.28)

この用法も、主節で、あるいは差分なしに使われると容認度が低くなる。

- (14) a. その山の展望台の場所は、中腹の山小屋の場所から250m高い。(7.60)
- b. その山の展望台は、中腹の山小屋から高いところにある。(6.78)
- c. その山の展望台の場所は、中腹の山小屋の場所から高い。(4.60)

#### 4.2.3 世代差

比較基準のカラ格の容認度には世代差が見出された。たとえば(10)，(11)の文の容認度は世代別では下図に示すとおりである。

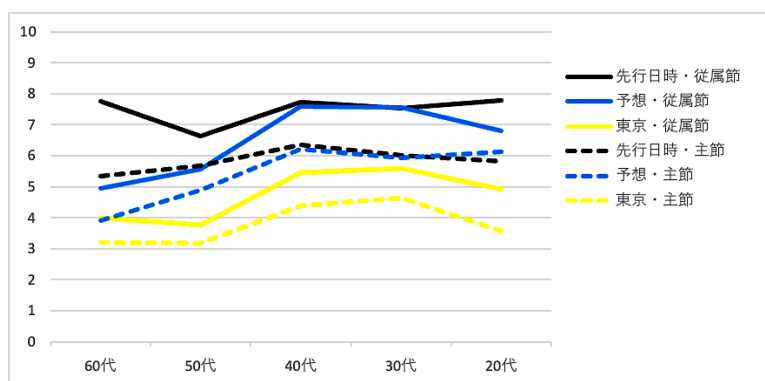


図5 比較基準カラ格の容認度における世代差

世代差が「見かけ時間」であるとする考え方からすると (Labov 1963, 1966)、この用法が現在進行中の変化であることが伺える。

## 5. 全体的考察

4.2 で示した結果調査から、比較基準のカラ格が容認される度合いが高くなる条件として、i) 従属節で使われている、ii) 差分句が共起している、iii) 比較の対象が過去の一時点であるか、その時点での数値である、が確認された。また、位置規定のカラ格は、比較基準のカラ格と統語的な特性（上記の i, ii）が同じであり、かつ容認度が高い。したがって比較基準のカラ格はこの位置規定のカラ格から発展したと考えるのが自然であろう。位置規定のカラ格は、先行時刻での移動物の位置を示す。比較基準のカラ格は、それと並行して、先行日時での変化の値を示す場合がもっとも容認度が高い。位置規定のカラ格は、空間的位置変化を背景とした用法から、時間的数値変化を背景とした用法へと拡張したと考えられる。上記 i), ii), iii) の制約が薄れていくと、さらに変化が進むことになる。

これが正しいとすると、位置規定のカラ格から比較基準のカラ格へは、以下の順で拡張したと考えられる。

- (15) a. その山の展望台は、中腹の山小屋から 280m 高いところにある。【空間的变化が背景】
- b. 12 月の内閣支持率は、前の月から 3 ポイント高い 44 ポイントでした。【時間的变化が背景】
- c. 1 日の新型コロナウイルスの新規感染者数は、前日から 43 人多い 245 人でした。【程度の一般化（高さに限らない）】
- d. 今日の新規感染者数は予想から 15 人多い 70 人だった。【時間的变化と無関係】

この拡張を刺激したと思われるのが、3.2 で見た、増減動詞と共起する変化起点値を表すカラ格の拡大と考えられる。比較基準のカラ格で先行値を表す用法は増減動詞と共起する変化起点値を表す用法と基本的に意味が同じであるため、後者の用例増加に触発されて、(15b, c) の用法が広がったと推測される。

Labov, William. 1963. The social motivation of a sound change. *Word* 19: 273-309.

Labov, William. 1966. *The social stratification of English in New York City*. Washington DC: Center for Applied Linguistics.

Matsumoto, Yo. 1996. How abstract is subjective motion?: A comparison of coverage path expressions and access path expressions. Adele E. Goldberg (ed.) *Conceptual Structure, Discourse, and Language*, 359-373. Stanford, CA: CSLI Publications.

Talmy, Leonard. 2000. *Toward a cognitive semantics Vol 2: Typology and process in concept structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.